

19世紀欧州言語学の reduplication

(重複形)に対する言語学的解釈

— 『英語重複語辞典』(1866) 序文の翻訳 —

澤登 春仁・安部 清哉・武井 博美

キーワード = reduplication, 重複形, 口頭言語, 『英語重複語辞典』, pidgin, creole,

1. reduplication に対する言語意識と言語学的一特質

安部 清哉

(1) reduplication の言語学的特性をめぐる問題

言語における形態論的機能である reduplication (重複形, 以下, 重複形で表記) には様々な側面があるが, その一つとして, 言語学では, これまで, pidgin, あるいは, creole に顕著に見られる特徴であることが指摘されてきている (安部清哉1997 a 参照)。

一方, 安部清哉 (1997 a・b) などでも指摘したように, 口頭言語の特徴としてとらえるべき面が指摘され, むしろ, そのように, 口頭言語に顕著な特徴としてとらえる視点の方が, pidgin・creole のもつ口頭語的特性をも広く包括した, より広範な説明を可能にしてくれるように思われる。なぜなら, そのような口頭言語の特徴という視点は, 重複形が, 多くは口誦を伴う傾向をもつ韻文においても認められることや, また, その基本的用法である反復・継続の意味的強調が, 書記言語では, 一部の言語ではあるものの, 歴史的に衰微・消滅してきていることをも (安部清哉1997 a 参照), 統一的に説明してくれるように思われるからである。

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

しかし、欧米の言語学においては、ここに挙げる『英語重複語辞典』序文に見られるように、重複形(特に、「完全重複形」の場合)は、「未開な」劣った言語に見られる特徴であるという見方が少なくなかった。それは、重複形が、pidgin・creole の特徴として指摘されていたこととも関わるものであり、また、まだ研究の進んでいなかった pidgin・creole 言語に対する位置付けとも深く関わっていたように思われる。

(2) reduplication に対する言語偏見意識

執筆者達は、重複形に関する言語類型論的研究の一環として([付記]参照)、英語における重複語形を収集する過程で、19世紀の『英語重複語辞典』に、重複形に対する解説と興味深い言語意識を見出すことができた。そこに見られる解釈は、現代言語学にも多少の影響を及ぼしていると考えられる。そこで、19世紀のヨーロッパ言語学での重複形に対する解釈がうかがえる資料として、翻訳による紹介を試みることにした。

ここに挙げるのは、Henry B. Wheatley 編『英語重複語辞典』の序文である。今回使用したテキストは、

Henry B. Wheatley, A Dictionary of Reduplication Words in the English Language; Asher and Co. 1866, London, のリプリント版で、1975年に、Folcroft Library Editions から再版されたものによっている。その冒頭には、例えば、次のような興味深い記述が見られる。

重複語が生まれる最初の形態は、その前半部分と後半部分が全く同一のものである。この主の重複語(完全重複形:安部注)の例は、もっとも未開な言語(原文:the most uncultivated tongues)に見出すことができる。しかし、より高度な文明の言葉(原文:those higher in the scale of civilization)を調べてみると、単語の前半部分と後半部分で一部分のみが微妙に変化している単語(部分重複形:安部注)の数が非常に増加していることがわかる。本書では、このうち、後者のものだけを扱いたいと思う。

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

ここでは、完全重複形を「もっとも未開な言語」に見られる特徴としている。しかし、「本書では、このうち、後者のものだけを扱いたいと思う。」という記述からもわかるように、英語においても、その「未開な言語」にあるという、前者の完全重複形が存在していることがわかる。(序文中の「看護婦の会話に耳を傾けているだけで、」という記述も参照される。)また、実際に、現代の英語表現においても、その完全重複形を見出すことができるのである。

この辞書で、「後者のものだけを扱い」、完全重複形の方は意図的に掲載されていないのには、ここに見られるような重複形に対する言語意識が、かつてあったためであることを見て取ることができる。

(3) reduplication の口頭言語における特性と書記言語との関係

しかしながら、近年では、重複形の研究も進み、また一方で、pidgin・creole の研究も進んできたこともあって、口頭言語という視点からの研究も行われるようになってきていることは注目しておきたいと思う(参照, Mary Niepokuj, 1997)。

また、重複形の現象と、pidgin・creole とを、単純に結びつけてきたことに対しても、次のような見直しの動きが見られる。

過去において、ピジン、クレオールの特徴として重複形 (reduplication) があまりにも強調されすぎた。(Loreto Todd, 1974)

重複形は、やはり、口頭言語における表現の特性という面から広く検討していく必要があるように思われる。

また、そこには、口頭言語という側面ばかりでなく、例えば、日本語のように、固有文字(仮名)による文章表現の発達に呼応するかのようにも見える完全重複形の衰微(副詞化)や、アイヌ語のように、書記言語形式である固有の文字を持たなかった言語での重複形の用法の生産性の高さ、あるいはまた、韓国語のように、固有文字(ハングル)の獲得が比較的遅い言語に見られる重複法の存続、などといった、文字ないし書記言語との関連という歴史的な側面も

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

関わっているように思われる。(安部1997a)

そのような書記言語の歴史的変遷(文字による文章表現史)との、負の相関性という視点からの研究も必要であると考え。また、近年の言語学における重複形の研究に関しては、また別の機会に取り上げることにしたいと思う。

この『英語重複語辞典』に見出し語形として掲載されている部分重複形の単語リストは、別に一覧表として作成済みであるが、それについても稿を改めて公表する予定である。

[付記] 本研究は、次の研究費による研究成果の一部である。

◎1998年度フェリス女学院大学大学院共同研究費「reduplicationに関する言語類型論的研究のための基礎的調査研究(継続)」(代表者:安部清哉, 100万円)

澤登春仁は、本研究分担者(本学英文学科教授)、武井博美は、本研究協力者(本学大学院人文科学研究科博士後期課程英文学専攻大学院生)である。

最後になったが、継続2年間に及ぶ本研究にご配慮くださった、フェリス女学院大学大学院の関係各位に、この場を借りて深く感謝申し上げます。(最新の研究成果として、他に安部(1998, 1999 a・b)がある。)

参考文献

Loreto Todd (1974) *Pidgins and Creoles*, Routledge & Kegan Paul, (ロレト・トッド (1986) 『ピジン・クレオール入門』, 田中幸子訳, 昭和61・7, 大修館書店)

Mary Niepokuj (1997) *The Development of Verbal Reduplication in Indo-European*, Institute for the Study of Man Inc., Washington,

安部清哉 (1997 a) 「古代日本語の動詞重複形 (reduplication) 二種の語法と方言分布及びその言語類型地理論的問題」(加藤正信編『日本語の歴史地理構造』, 平成9・7, 明治書院, 61~71頁)

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

安部清哉 (1997 b) 「動作の併行表現の歴史——上代 動詞終止形重複形・動詞連用形重複形——」(川端善明・仁田義雄編『日本語文法——体系と方法』, ひつじ書房, 平成9・10, 133~152頁)

安部清哉 (1998) 「日本列島上の歴史と文化における分布境界線 “関東・越後線群” ——人類学・考古学・民俗学・気候学篇=地図集 II——」(『玉藻』34, 平成10・9)

安部清哉 (1999 a) 「古代語からみた『ひな』と『みやこ』——王化の最前線としての“あづま”——」(『別冊歴史読本 日本古代史「王城と都市」の最前線』, 平成11・2, 新人物往来社)

安部清哉 (1999 b) 「古代日本語における古い語彙・音韻と新しい語彙・音韻の言語類型論的比較研究の可能性」(佐藤武義編『語彙・語法の新研究』(仮称), 平成11予定, 明治書院)

安部清哉 (未発表) 「19世紀英語重複形 (部分重複形) 語形リスト」

2. Henry B. Wheatley 編『英語重複語辞典』序文 翻訳

澤登 春仁・武井 博美

『英語重複語辞典』序文

すべての言語の自然的成長と形成に影響を及ぼす様々な要因の中に、ひとつ、その言語自体の内部で働き、重複語 (reduplicated words) を生み出すような要因となっているものがある。重複語が生まれる最初の形態は、その前半部分と後半部分が全く同一のものである。この種の重複語の例は、もっとも未開な言語に見出すことができる。しかし、より高度な文明の言葉を調べてみると、単語の前半部分と後半部分で、一部分のみが微妙に変化している単語の数が非常に増加していることがわかる。本書では、このうち後者のものだけを扱いたいと思う。

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

一般に考えられている以上に、英語にはこの種の単語が多い。残念なことに発見できなかった単語がまだ数百はあるという可能性は否めないものの、様々な資料を検索した結果、これまでに600語近く収集することができた。

重複語に興味を覚え始めた頃、それらをまとめた文献はないものと思っていた。しかしその後、David Booth が彼の著 “Analytical Dictionary of the English Language”(4⁰. London, 1835)の中で、112のリストを作成していたことを知った。とはいえ、その内容は語の羅列に終始し、詳しい説明があるわけではなかった。更に、“Adverbs of Repetition”(重複の副詞)という、あまり適当でないタイトルの下、clapper-claw, dafy-down-dilly, sixes-and-sevensといった語も取り混ぜて扱っていた。「ある程度、収集には注意を払ったが、完璧と呼ぶには程遠いリストであるかもしれない」と、Booth 自身も語っている。1862年、著名な学者 Pott 教授がこの問題に関する研究結果を著している(タイトルは“Doppelung (Reduplikation, Gemination) als eines der wichtigsten Bildungsmittel der Sprache beleuchtet aus Sprachen aller Welttheile durch A. F. Pott, Dr. Lemgo & Detmold.”)。8⁰. 純粋な繰り返し語(double words)の考察に主眼を置いたものであるが、一部が変化した語も多く含まれている。すなわち、あらゆる言語を収集対象としているものの、しっかりした体系化がなされないまま雑多に扱われ、そのため残念なことに有益性が損なわれてしまっている。英語の例も非常に少ない上、そのうちかなりのものが正確とは言い難いのではないかと思われる。

重複語は非常に簡単に作られる(看護婦の会話に耳を傾けてみるだけで、いかに自然に重複語が生まれるかがわかるだろう)。そのため、重複語を見つけたらすぐに抜き出して、(どうして作られたかという)根拠を明らかにする必要があると私は考えてきた。

重複語は、大きく分類すると3種類になる：

I：単語の前半部分と後半部分は基本的には同じだが、語頭の文字だけが異

なるもの(例: fol-lol, namby-pamby, roley-poleyなど)。最初がhで始まっている単語がおよそ半分近くもある, というのがこの分類の注目すべき特徴である(例: hockerty-cockerty, hodge-podge, hubble-bubbleなど)。

II: 語頭の文字は同じだが, 中間にある文字や母音が一部異なるもの。この分類に含まれる語のうち, 約3/4で i が a に変化しており(例: bibble-babble, chit-chat, flim-flamなど), 残りの1/4で i が o に変化している(例: ding-dong, jig-jog, sing-songなど)。また, ごく僅かながら他の変化もみられる(例: chemp-champなど)。

III: 割合としては最も少ないが, 音便の問題上, 後半部分の語に 1 ないし複数の文字が付加されているもの。その結果, 2つの母音が重なる母音連続(hiatu)の発生が避けられている(例: argle-bargle)。

第I分類の多くを占めるhで始まる単語をこの分類に含めるべきか否かに関しては, 疑問の余地がある。というのも, 例えば, hobble-gobbleがもともとgobble-gobbleであったとすれば, gがhに変化したのかもしれないという疑問が生まれてくるし, あるいは単にgが欠落してobble-gobbleになった後, 帯気音のhが付加されたのかもしれない, と考えられる。

1つの語源が他の語の語源の説明に役立つことがあるため, これらの単語をひとまとめに扱うことで, それぞれの単語の語源が明らかになってくるかもしれない。しかしながら, 語源の説明とは往々にして難しいものであるし, 結果, 辞書編集者によって不条理な語源を与えられているものもある。例えば, helter-skelter は hang の意味の haltar と, order の意味の kelter から来ているとか, hugger-mugger は hug or embrace in the dark (暗闇で抱きしめる) という意味の huger morcker に由来するとか言われている。Jamieson は, hiddie-giddie の語源は head (頭) が giddy (ちゃらんぽらん) な人だと推測するし, Johnson は roley-poley の語源を「ボールをプールに転がして入れるゲーム」にあると説明づける。はたまた Webster は shilly-shally がロシア語で「道化を演じる」という意味の shalyu から来ていると推測する。hocus-pocus がラテン語の hoc est corpus に由来しているとする Tillotson の推測にいたっては全く理解しがたい。

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

重複語の形成には様々な要因が絡み合っている。しかし大多数は、単語の前半部分は意味を強調する単なる接頭辞だとする分類に属するであろう。つまり、washy-washyとかvery washyという代わりにwishy-washyという言い換えが発生した、と考えられるのだ。以下は同様の例である。単語の後半部分が本来の正しい語であることは、ほぼ間違いないだろう。

bibbery-bobberyの語源はrow(列)の意味のbobbery。bibble-babbleの語源はbabble。bringle-brangleの語源はbrangle。brittle-brattleの語源はbrattle。chit-chatの語源はchat。clit-clatとclitter-clatterの語源はclatter。crick-crackとcrickle-crackleの語源はcrackle。criss-crossの語源はcross(crissはChristが転訛したものなので、criss-crossはChrist's cross(キリストの十字架)の意味だとする研究者もいるが、やはりこれは重複語であろう)。dilly-dallyの語源はdally。dogle-dangleの語源はdangle。driggle-draggleの語源はdraggle。fible-fableの語源はfable。fingle-fangleの語源はfangle。flim-flamの語源はflam¹。gibble-gabbleの語源はgabble。hedly-medlyの語源はmedley。higgle-haggleの語源はhaggle。higgledy-piggledy, higlety-piglety, higly-pigly, hidgelly-pidgellyの語源はhickledy-pickledyやhicklepy-picklebyというスペルがあるので、pickleと関係があると思われる。highy-flightyの語源はflighty。hippety-hoppetyの語源はhop。hob-jobの語源はjob。hubble-bubbleの語源は、bubbleがhubbubの指小辞でないならばbubble。huffle-scuffleの語源はscuffle。hurdy-gurdyの語源はgurdy(おそらくイタリアの楽器の名前ghirondaが転訛したものと思われる)。jibber-jabberの語源はjabber。jig-jogの語源はjog。kingle-kangleの語源はcangle(口論している状態のこと)。knick-knackの語源はknack。miz-mazeの語源はmaze。niddle-noddleの語源はnod。祈禱のことばを早口で言ったpitter-patterは、一般にはpater-nosterが語源とされている。pit-patという省略形にもなる二番目の意味「しずくが落ちる」の語源も同じかもしれない。しかしおそらくは擬態語であると思われる。plash-plashの語源はplash。prittle-prattleの語源はprattle。ribble-rabbleの語源はrabble。rible-rambleの語源はramble。rip-rapの語源はrap。scrip-scrapの語源はscrap。shilly-shallyの語源は

shall。ship-shapeの語源はshape（しかし、船員の間では船に荷物を積載する順番のことを意味する）。skimble-skambleの語源はscamble。skimper-scamperの語源はscamper。smick-smackの語源はsmack。splish-splashの語源はsplash。splitter-splatterとsplitter-splutterの語源はsplatterとsplutter。squish-squashの語源はsquash。titter-totterの語源はtotter。tittle-tattleの語源はtattle。twiddle-twaddle, twiddle-cum-twaddle, twiddleum-twaddleumの語源はいずれもtwaddle。twittle-twattleの語源はtwattle²。widdle-waddleの語源はwaddle。さらにこの他にもたくさんあると思われる。

以上が重複語の形成規則であるが、中には前半部分を基にして、不規則的に形成される語もある。もちろん見分けるのは難しいが、以下に挙げるものは間違いなくこのタイプの例であろう。clatter-clutterの語源はclatter。giggle-gaggleの語源はgiggle。handy-pandyの語源はhand。hickup-snickupの語源はhiccough。hurry-burryの語源はhurry。mingle-mangleの語源はmingle。mixty-maxtyの語源はmixture。roleypoleyの語源はroll。rowdy-dowdyの語源はrowdy（喧嘩好きな人のこと）。royster-doysterの語源はroyster（威張り散らす人）。tol-lolの語源はtol（tolerableの短縮形）。whiffle-whaffleの語源はwhiffle（躊躇する、ぐらつくの意）。whim-whamの語源はwhim。wriggle-wraggleの語源はwriggle。

これらに加え、韻の影響を考慮しなければ説明がつかないタイプの語群もある。つまり、2つの全く異なる語が韻を踏むという理由から結合される場合があるのだ。こういった単語を重複語の範疇に入れることに対して、反対する向きもあるかもしれない。しかし、外見上であれ重複語に類似していることには変わりがないため、これらを無視すると辞書として不完全なものになるだろうと思われる。clap-trap, fluster-bluster, muck-struck, rumble-tumble, tag-rag, toil-moilといった語の前半部分と後半部分は、いずれも元来そのままの姿を残している。hab-nabはhaveの意味のhabbanとnot to haveの意味のnabbanから成っている。tit-bitはtidあるいはtender pieceから成っている。whiney-pineyとpiney-whineyはwhineとpineから成っている。willy-nillyはwillとnot willから成っている。

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

piggabackがどの分類に属するかを判断するのは難しい。pick-back, pick-a-packあるいは pick-packと綴ることもある。pack on the backのことなのか, pig on the back のことなのか, または, back を語源とすること自体が間違いなのか。おそらく, pack が基となっている語で pick が単なる繰り返しの語なのであろう。

音や意味を模倣して表現することを目的とした, いわゆる擬声語的な語も多くある。bim-bom, boo-hoo, bow-wow, cherry-churry, chiff-chaff, click-clack, clickety-clack, cling-clang, clinkum-clankum, clish-clash, ding-dang, ding-dong, flip-flap, flip-flop, flipperty-flopperty, peet-weet, piff-paff, pit-pat, poolly-woolly, rat-tat, ting-tang, ting-tong, tirra-lirra などがそれにあたる。

さらには, 合唱用の韻として使われる, 意味を持たない語もある。例えば hickety-pickety, jeminy-creminy, keemo-kimo, rhinery-chinery, slitherum-slatherum, whiskey-whiskey などである。

最後になるが, 正しい単語や言葉使いを滑稽に変えた語群もある。melancholy から変化した colli - molly, nisi - prius から変化した hizey - prizey や niz - priz などである。

さて, 英語以外の言語に於ける重複語に注目することも興味深いことではないだろうか。おそらく重複語はあらゆる言語にみられるに違いない。実際のところ, サンスクリット語には多く存在するし, アラビア語ではある程度までなら即興で形成されることがわかっている。

ジャワのスンダ語には, 両方の種類の標本がおびただしく存在する。“A Dictionary of the Sunda Language of Java”(by J. Rigg, Verhandelingen van het Batav. Genootschap, Deel xxix. 1862) に掲載されている9308語の中からは, 純粋な重複語が112語発見された。例えば--

ABIG-ABIG (屋根の切妻の角)

BULAN-BULAN (川魚の名前, Megalops Indicus)

CHIN-CHIN (鐘の音)

DAIK-DAIK (意地悪)

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

EMBUL-EMBUL (姿を現わすこと)

これに加え、単数名詞が重なれば複数形になるという規則がある。そこで、家 (house) を表す *imash* が重なって *imash-imash* になると家々 (houses) になるという例もあった。また、動詞と名詞の両方によくつく接辞 *an* を含む語も25個あった。例えば--

ABRIT-ABRITANAN (飛ばすこと)

CHANG-CHANGAN (しっかりつかむこと。chang-changは「つかむ」の意)

EDAN-EDANAN (道化を演じること。edanは「愚かな」の意)

先ほど述べた構造と同じ構造を持つ語も68語ある。例えば--

BULAK-BALIK (ねじりまわすこと)

BURAK-BARIK (散り散りになること)

CHEK-CHOK (おしゃべりすること)

KUPLOK-KEPLOK (水しぶき)

LAPUT-LIPUT (ちょうどおおい隠される)

UNTANG-ANTING (揺れること、ぶらぶら振ること) *anting* という語は、「前後」の意である。

J. Ihre の *Glossarium Suiogothicum* にもいくつか重複語がある。例えば--

FICKFACK *præstigiæ, quidquid clanculum ad decipiendos alios suscipitur*

MISKMASK *congeries rerum multarum, quam eandem vocem adoptarunt Angli Gallicque mic-mac*

PICKPACK *reculæ, vasa abiturientis*

HWISKHWASK *susurrus, clandestina consultatio*

SNICKSNACK *gerræ*

WILLERWALLA *confusio*

TISLTASL *secretæ mussitationes, Angl. titl-tatl*

DINGLDANGL *de rebus pendulis et huc illuc fluitantibus*

SPINGSPANG *plane novus*

19世紀欧州言語学の reduplication (重複形) に対する言語学的解釈

FIMBULFAMBE Isl. stultus

以下は現代語からの例である：

(ドイツ語) では--

BIMMEL-BAMMEL dingle-dangle ; bimmel は甲高い調子で鳴る小さな鐘

FICK-FACKEN いたずらすること

FICK-FACKER 狡猾な人

FICK-FACKEREI 策略

HOKUS-POKUS ごまかし (英語での意味と同じ)

HOLTER-POLTER 轟く音の擬態

KLING-KLANG チリンチリン鳴る音

KLIPP-KLAPP パタパタ (カタカタ) いう音

MISCH-MASCH ごちゃませ, ごたまぜ

PICK-NICK 夕食用のクラブ

PIFF-PAFF 英語やフランス語と同じ

SCHNICK-SCHNACK 無駄話, おしゃべり, 世間話

SING-SANG 単調なリズム

TICK-TACK ペタペタいう音

TRICK-TRACK 西洋すごろく

WIRR-WARR 混乱, ごたまぜ, 大騒ぎ

WISCHI-WASCHI 無駄話, 世間話

ZICK-ZACK シグザグ

(オランダ語) では--

FIKFAKKEN 空騒ぎすること

FIKFAKKER 軽薄な人

HOKUS-BOKUS ごまかし

KIKEL-KAKEL 無駄話

(デンマーク語) では--

RIPS-RAPS 1. やじうま ; 2 無意味なもの, がらくた, つまらないもの

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

HULTERT-OG-BULTERT さかさま

(スウェーデン語) では--

SICK-SACK ジグザク

TRIK-TRAK 西洋すごろく

HUMMEL-OM-TUMMEL めちゃくちゃ, 混乱

HULLER-OM-BULLER めちゃくちゃ, 混乱

Huller-om-buller は, Ihre's Glossary では英語の hurly-burly (大騒ぎ), ドイツ語の holl-und-boll と同じであると定義されている。

(フランス語) では--

BRIC-À-BRAC がらくた

CI-ÇA シーソー

CRIC-CRAC めりめり

FLIC-FLAC パタパタ

HURLU-BERLU むこうみず, 大騒ぎ

MIC-MAC 遊びで, 裏取り引き

PÊLE-MÊLE 乱雑

PIOLÉ-RIOLÉ けばけばしい, まだらな

PIQUE-NIQUE ピクニック, 祝祭日に集まること

TIF-TAF フランスのことわざで, パタパタを同じ意味

TIRE-LIRE ヒバリの歌

TIRE-LIRER ヒバリのよう歌うこと

TRIC-TRAC 西洋すごろく

TURE-LURE 繰り返す

ZIG-ZAG ジグザグ

(イタリア語) では--

TIPPE-TAPPE 騒音を表す擬態語

ZIG-ZAG 1. ジグザク; 2. 曲がった木の幹

(スペイン語では) --

CHIN-CHON obsolete for chichon, 打撲

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

CIG-ZAQUE シグザク

FLIN-FLON 顔色のよい肥満男性

NINI-NANA ハミングする時の特別意味がない言葉

TIQUIS-MIQUIS 気取った表現をあざける野蛮な言葉

TRIFI-TRÁPE がらくた, 混乱した考え

TRIFI-TROPA 腸のけいれん

TRIS-TRAS 同じことの何度もの繰り返し

ZIFI-ZAPE 殴り合いの乱闘

ZIS-ZAS 何度も殴る時の音を表す擬態語

以上の例から、異なる言語間でも、同じ意味で使われる重複語がかなりあることがわかる。フランス語の zig-zag, ドイツ語の zick-zack, スウェーデン語の sick-sack, イタリア語の zig-zag, スペイン語の cig-zaque, ポーランド語の zyg-zag などがいい例であろう。ドイツ語, スウェーデン語, フランス語, 英語には共通して tric-trac という語がある。

この種のテーマに沿った素材を集める際に、厳密に区分できない単語が出てくるのは当然であるが、それらの語源が明らかに同じ要因に基づいていることもまた確かである。この辞書に掲載した語のいくつか、例えば rat-tat, hob-nob, pick-pack, pit-pat はそれぞれ rat-a-tat, hob-a-nob, pick-a-pack, pit-a-pat と綴ることが可能だ。この分類に属するのは、他に dub-a-dub と綴る rub-a-dub がある。hoit-a-poit は Forby によると hoit (ぶしつけな若者) と extremely pert (非常に凶々しい) から、重要な雰囲気 (airs of importance) と仮定される。サイコロを使うアメリカのゲームである chuck-a-luck, cricket-a-wicket は、楽しい (merry) とか上下に跳ね回る (jig up and down) と説明される。tamarack (アメリカカラマツ) は、hack-ma-tack という名前に変わった。huckaback は hag-a-bag に変わっている。

“Clean *hag-a-bag* I'll spread upon his board

And serve him with the best we can afford.”

--Ramsay, *Gentle Shepherd*, Act i. sc.2

19世紀欧州言語学の reduplication (重複形) に対する言語学的解釈

韻を踏むことから、形容詞と名詞が結合してできた単語もある。例えば、big-wig (重要人物), lin-pin (輪どめピン, くさび), nick-stick (刻み目をつけた棒, 竹などで作ったものさし), silly-billyなどが挙げられる。

take the back-trackとは一歩後戻りすること, または撤退することであり, キスすることはlip-clipやlip-clapと言われる。a poor yay-nay fellowとはイエス・ノーしか言えない人のことであり, give the nay-say of a houseとは相手に拒否を伝えることである。また, sad-badとsadly-badlyはとてもひどいということである。「水の詩人」Taylorは作品の中でrusty-fusty-dustyという語を使っている--

“Our cottage, that for want of use was musty,
And most extremely *rusty-fusty-dusty*.”

--1630 Workes, Pt. II. p. 24.

これに加え, 韻をうまく使った慣用表現もある。例えば, lill for lall, quit for quat, tit for tat, tint for tant, whicket for whacketは, 全て同じ意味を持っている。gnipper for gnopperは臼をひいて出る音を表すのに使われる (Jamieson)。hidder and shidderは, SpenserがGlosseで使っている表現であり, he and sheの意味を持つ--

“For had his wesand been a little widder,
He would have devoured both hidder and shidder.”

--Spenser, *Shep. Kal.*, Sept. 210;

airt and pairtとも綴る art and partは, 犯罪に加わった人間を告訴する時に使われる, スコットランドの司法手続き用語である。partの意味はわかりやすいが, artは難しい。犯罪が被告人の策略 (art) と技能 (skill) によって成り立つとする説明だけでは満足が得られない。おそらく, artは韻を合わせるための単なる接辞だと思われる。

Crimbling and cramblingは--

“Saxon *crimblings and cramblings* are bad enough.”

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

--1835. W. Beckford, *Recollections*, p.137.

dawdle and doodle は--

“Let us *dawdle and doodle* no longer.”

--同上, p. 7.

draff and chaff は--

“Sir Charles Wood was the one infallible, all the rest were
draff and chaff.” --*Examiner*, Feb. 10, 1866.

rags and jags は--

“Hark! hark! the dogs do bark;
The beggars are coming to town,
Some in *rags*, some in *jags*,
And some in a velvet gown.”

--*Nursery Rhyme*.

他に right and tight, roup and stoup, rump and stump, stump and rump, stouth and routh などがある。

see-saw は jiddy-cum-jidy, teter-cum-tawter, titty-cum-tawter, humble-cum-dumble であり--

“‘Madam,’ says Phœbus, ‘I am your *humble*,
And most obedient *cum dumble*;
By Vulcan’s horns I vow and swear,
I little think to find you here.’”

--Jon. Bee, *Slang Dictionary*.

buff-ne-baff は一方でも他方でもないということである。

Nash は, *Have with you to Saffron Walden* (1596) の中で, piggen-de-

wiggen と wrinkle-de-crinckledum という語を使っている。

ことわざの多くが馴染みやすいのは、この種の韻を踏んでいるためだろう。例えば、“fast bind fast find” (締りが固ければ失うことなし) や “by hook or by crook” (どんなことをしてでも) などである。³

この分類に入る語群は、辞書という神聖な領域へ入ることを今まで許されず、辞書編集者たちから全く相手にされない状態だった。しかし、この傾向は現在では大きく変わり、言葉はかつてのように無視されることもなくなった。従って、1811年に雑誌記者が書いた次のコメント (*Monthly Magazine*, 1811, p. 552) を見て、同調する人は今や殆どいないのではないだろうか。

「どこの国の言葉を扱うにせよ、辞書を作る人間というのは炭鉱労働者並みに扱われるものなのかもしれない。しかし、言葉というがらくたを集める人間は、人々の並外れた同情を買うに値する。その挙げ句、燃え殻をふるいにかけているのか、などと人から言われるかもしれないが。」

[様々な引用例を提供して下さった Furnivall 氏と読者の皆様に謝意を申し上げます。ご提供いただいた引用例には D の文字を付してあります。]

[注]

4⁰. 未詳

8⁰. 未詳

8¹ “A flam more senseless than the roguery.”

— *Hudibras*, part ii., canto iii., v. 29.

8² Butler の *Hudibras* (part ii., canto i., v. 77) における “this tattling gossip” は、1664年の二つの初版本では “twattling gossip” となっている。

8³ F. W. Farrar 師は、韻や類韻の奇妙な面白さを以下のように指摘している。

「アラビアの名前の、Harut と Marnt, Able と Kabel (英語名: Cain と

19世紀欧州言語学の reduplication(重複形)に対する言語学的解釈

Abel), Dalut と G'ialut (同: David と Goliath) は, Herod における Kophy と Mophy などに比類する。聖書では, Huz と Buz などの例がある。ヒンドゥー人は, 一定して英単語にまで意味のない韻を付け加え, button-bitten とか kettley-bittley などと言う。しかし, まさしく最良の作家たちによって, ある種の *παρήχησις* (重複法) が使われていて, しかもそれが実に見事な効果を挙げながら使われているのだ。これは, 新約聖書における *πορνεία* (不倫) *πονηρία* (悪事), *φθόνοι* (嫉妬) *φόνοι* (殺人) (Rom. i. 29, 31), *ἀσινέτως* (思慮分別がなく) *ἀσυνθέτως* (背信的に), *κρίνεις* (裁く) *κατακρίνεις* (有罪の判決を下す) の例や, 祈禱書における holy と wholly, giving と forgiving, changes と chances などの例と同様である。Cicero や Sallust にも相通ずるこのような類韻は, St. Augustine のとりわけ大きな喜びであった。詩の中でも類韻は頻繁に登場する。—*αἰσχύνομαι* (恥かしく思う) *ἀλγύνομαι* (痛みを思える・気分を害する).'(Eur.), 'Apprehends and comprehends.'(Shakespeare, *Mids. Night's Dream*), 'Sorted and consorted.'(*Love's Labour Lost*), 'Sly slow hours.'(*Rom. and Jul.*), 'In every breath, a death.'(*All's Well*), 'Actions and exactions.'(Daniel), 'Fear the fierceness of the boy.'(Beaum, Fletcher), 'Shrill, chill with flakes of foam,'(Tennyson), などの例が挙げられる。

-- Farrar, *Chapters on Language*, 1865, p. 265 (note).

[付記] ギリシャ語部分の翻訳は, 研究分担者である斎藤治之氏(本学教授)による。